

大阪は‘まち’がほんまにおもしろい



破天荒! 直木三十五文学の原点を知る ～藝術は短く 貧乏は長し～

新人作家の登竜門「直木賞」。その由来となった小説家・直木三十五は谷町・空堀に生まれ育ち、当地にあったプラトン社で作家デビューを果たしました。直木が夢中で通った講談の貸本屋跡や、いまでも残っている迷路のような路地、急峻な坂道や謎めいた榎木の祠…直木文学のふるさと、その原点に迫ります。

大阪人・直木三十五

『大阪を歩く』に直木の「大阪人像」が登場します。「大阪の町人は人を押しのけてまでも金儲けをしたいとは思わなかった。儲かりまっか」と挨拶したり、すぐぼろの出る粗悪品を輸出したりして、大阪商人及び大阪人の面目玉を踏潰した野郎共は他国の奴にちがいない。大阪商人の代表として、蔵屋敷出入の人を挙げていいなら、彼等は悉く立派な男である。度胸と、見識と、洒落と、悟りと、諦めと、趣味と、多少の学問とそう云ったものを持った…つまり、大都会の、大商人らしい、都会人らしい、何処の都会にも共通する文化人であった。少くも西鶴、近松。下って懷徳堂から町人学者の輩出した当時の大阪人は、今の田舎者の成功者とは、ちがった人間であった。そして、私は、それを大阪人だと思っている」…直木は東京文壇で活躍しましたが、終生、大阪人としての自負と矜持を持ち合わせていたことが窺える文章です。

① 生家跡とペンネームの由来

直木三十五（本名・植村 宗一）は明治24年（1891）、父・植村惣一、母・静の長男として堂安寺町2丁目（現・谷町6丁目交差点）に誕生しました。惣一は古着屋を営みましたが、直木の「死までを語る」によれば「店先にはばっち（股引）二足と汚い古着が四五枚釣ってあっただけ」「桓武天皇時代からの貧乏」という有様でした。そんな生家でしたが市電拡張でなくなると「私の生れた、も一つの小さい家は谷町6丁目交差点の電車線路になってしまっている。これは大層嬉しい事だ!」（『大阪を歩く』）と愛惜しています。直木三十五という奇妙な筆名は「植村の植を二分して直木、この時、三十一才なりし故、直木三十一と称す」（『私の略歴』）とあり、苗字+実年齢という安直なものでした。32歳では三十二、33歳では三十三でしたが、34歳は何故か三十三のままで、35歳以降はずっと三十五でした。晩年は「自称35歳」で「35歳にしては頭髪が薄い」などと自嘲して得意でした。

② プラトン社跡と「映画監督 直木三十五」

大正12年（1923）、関東大震災で帰阪した直木はプラトン社（谷町5丁目乙20番地）に入社して、雑誌「苦楽」を創刊。谷崎潤一郎、里見弴、岡本綺堂らの小説に、直木自身も処女作「槍の権三重帷子」で作家デビューを果たしました。また直木の趣味が反映された華麗な都会的デザインは阪神間モダニズムの勃興に多大な影響を与えたといえます。同誌に「香西織恵」（直木の愛人の芸者）名義で発表した「心中きらゝ坂」が、日本映画の父・牧野省三の手で映画化されると、直木も映画事業に興味を持ち、大正14年（1925）、連合映画芸術家協会を設立。大河内傳次郎のデビュー作「弥陀ヶ原の殺陣」、日本初の文芸映画「京子と優文子」（愛人・香西織恵を銀幕デビューさせています）などを手がけ、昭和2年（1927）「一寸法師」疑問の黒棒」では直木が監督を担当しました。直木は誰もが作品を製作して配給できるフリーバックングで映画産業の発展を志しましたが、保守的な映画界に拒絶されて配給妨害を受け、多大な負債を抱えました。さらに俳優・月形龍之介と牧野の四女・輝子の不倫を直木が応援したことと牧野と断絶。「キネマ界の愚劣さに愛想をつかして」直木は映画事業から撤退。プラトン社に戻り、東京に進出していきました。ちなみに月形は戦後、直木の「黄門廻国記」を映画化した「水戸黄門」（1957）に出演。月形の当たり役となり一世を風靡しました。

③ 直木三十五寓居跡（現・堂安寺町2-3）

直木は5歳から19歳まで当地で過ごしました。東隣が小間物屋で呉服店、安餅屋、貸本屋と続き、この貸本屋で直木は講談師・神田伯竜の『太閤記』を読みました。子供で貧乏で近所なので本屋も立読みを黙許してくれ、「私が尋常小学を出て高等小学へ入ると共に成績が中位になってしまったのは、この貸本屋の御蔭」（『死までを語る』）と書くほど日参しました。また直木の少年時代には「法善寺に一軒、空堀に一軒、天満天神裏に一軒、講釈場」（『大阪を歩く』）があり、直木は「水戸黄門漫遊記」「木津勘助」「難波戦記」「岩見重太郎」といった大阪講談に親しみ、これが直木文学の原点となりました。

④ 榎大明神と直木三十五文学碑

「榎さん」と親しまれていますが、正しくは槐（えんじゅ）の木です。楠木正成がお手植した伝説があり、樹齢約650年といえます。直木はこの榎大明神の下で遊び、育ちました。文学碑は昭和6年（1931）発表の直木の代表作「南国太平記」の一節（藩主・島津斉彬の遺志を継いで大久保市蔵と西郷吉之助が決意を述べたシーン）です。同作は薩摩藩のお家騒動を題材に、西欧主義の蘭癖大名・斉彬派と、秘密の呪術者らを召抱えるお由羅派との対決を描き、史実と虚構を織り交ぜた伝奇小説です。司馬遼太郎「泉の城」（直木賞受賞）や山田風太郎「甲賀忍法帖」といった歴史娯楽小説の嚆矢として高く評価されています。

⑨ 桃園尋常小学校跡（現・桃園公園）

直木の母校です。「尋常小学校は桃園を、高等小学校は育英第一を（この三年時分から先生に反抗するのを憶えた）、中学は市岡を（ここで物理の大砲という綽名の先生が私を社会主義者だと云った。その時分の社会主義者という名は今の共産黨員以上の危険さを示していたから、余程、悪童であつたにちがいない）」（『大阪を歩く』）と記しています。

⑩ 直木三十五記念館

直木は昭和9年（1934）2月24日に結核性脳膜炎で死去しました。享年43。文藝春秋社長の菊池寛は、直木と昭和2年（1927）に自殺した芥川龍之介の盟友2人の死を深く悼み、昭和10年（1935）に「直木賞」「芥川賞」を創設しました。直木三十五記念館は市民参加型のミュージアムで、直木のバイオグラフィや所縁の品々を展示しています。直木の名文句「芸術は短し 貧乏は長し」の特製手拭などを販売しています。

直木三十五と芥川龍之介

大正9年（1920）、雑誌「人間」編集者・直木の依頼で、流行作家の芥川龍之介、菊池寛らが中之島公会堂で講演しましたが、その後の堀江の茶屋でのドンチャン騒ぎが語り草です。なぜか「主潮社」という謎の日本画家団体が宴会の主催者で、数十人の芸妓が来訪して乱痴気騒ぎに。芥川が毒気に当たられて部屋で休んでいると、直木が「静かな場所へ案内しましょう」というので、近所にくのかとついて行くと上本町から大軌（現・近鉄）、ケーブルカーに乗って生駒山中の茶屋へ。そこで芥川は芸者を宛がわれ、直木自身は堀江の愛人の元に戻りました。じつは直木は東京文壇の芥川、菊池を接待しながら、大阪画壇の主潮社や馴染みの芸妓への接待も同時に行っていたわけです。芥川は「植村という男は、なかなかヤリテだね。あの男はartistだよ」と呟いたといわれています。この衝撃的な講演旅行から直木は芥川、菊池と急接近し、やがて、この3人が文芸雑誌「文藝春秋」の黎明期を支え、日本文壇の一大潮流となっていました。

⑤ お祓い筋（熊野街道）

平安期、京の公家が熊野参詣時に当地に立ち寄って清め祓いをしたことが地名の由来といえます。「私の家のうしろが丁度のぼくと、崖になっている高見であるが、この下に今大阪の落語界で大立者と称されている九里丸が住んでいた。この人の父が大阪中を風靡した東西屋（チンドン屋）の元祖・九里丸で大阪奇人伝中の一人である。夜になると囃子の稽古をするので、私達子供は、のぼくの狸が又囃しとうると云っていた」（『死までを語る』）とあり、この「のぼく」（野莫）が空堀のことで直木はよくお祓い筋を下って遊びにきました。

⑥ 育英第一高等小学校跡（現・南高等学校）

元は育英第一高等小学校で直木の母校です。同時期には小説家・宇野浩二も通いましたが余り交流はなく、直木が育英から市岡中学を経て早稲田に入学してから2人は親交を深めました。ともに早稲田中退ですが、直木は卒業写真の撮影会に参加して「卒業した」と嘘について見事に両親を騙しています。宇野の回想によれば、直木が芸者の香西織恵に惚れたとき、一目見ようと嫌がる宇野を誘って連日、風呂屋で待ち伏せたといえます。そんな直木ですが、いざ座敷に織恵を呼ぶと煙草を吹かして黙然と坐るだけ。やがて織恵の方から痺れを切らして「あなたが好きよ」と書いた紙片を渡しました。直木は有頂天でしたが、そんなことはおくびにも出さずに、紙片を大事に財布にしまって自慢したといえます。

⑦ 空堀通商店街

大正時代に地元の延命地蔵の縁日に夜店が出て、そのルート上に現在の商店街が形成されたといえます。空堀通を東に進んだ清水谷に高等女学校ができると、女学生がよく通り、育成小学校時代の直木は「あいつ、別嬪やな」「左向け左っ、こらっ、鼻べちゃ向かかんか」などと悪態をつき、やがて校長に「本校の生徒の中に品性を重んじない者がある」と訓示されて禁止されたエピソードが伝わっています。

⑧ 薄病院跡

直木には早世した叔父・新井孝次がいましたが、その叔父の親友が薄病院院長の薄忍一でした。病弱だった直木は薄病院によく通い、「私が、とにかく四十三まで生きて来られたのは、この人が居られたから」（『死までを語る』）と語るほど世話になりました。また直木は19歳の頃、薄病院でアルバイトをして、そこで知り合った徳子が初恋の相手でしたが、徳子の母が厳格なクリスチャンで2人は会う事を妨害され、その恋は実りませんでした。ちなみに薄は病院内に土俵を設けるほどの相撲好きで、貧乏力士の食事の世話や無料治療をしたことから病院の住所名「谷町」が相撲の後援者「タニマチ」へと転化した説があります。「業代1日4銭だが貧乏人は無料。金持ちは2倍、3倍払ってほしい」といった治療方針で、地域住民から深く敬愛され、まさに直木の考える「大阪人」の象徴的人物でした。

【注意事項】 この地図は「大阪あそ歩」のまち歩きの資料として作成されました。まち歩きには、歩きやすい服装と靴を着用してください。車などによく注意し、各自で責任をもって行動してください。また、住宅地では住民のプライバシーに十分配慮して歩きましょう。

【お問い合わせ】 大阪コミュニティ・ツーリズム推進連絡協議会「大阪あそ歩」事務局 電話06-6282-5930（財団法人大阪観光コンベンション協会内）「大阪あそ歩」の詳しいプログラムはホームページをご覧ください。 <http://www.osaka-asobo.jp> または [大阪あそ歩](#) でネット検索を。

大阪あそ歩のコースは約2～3km、2～3時間程度を基準として作成されています。